

アフリカ 女子割礼

研究の現状と課題

「女子割礼」(Female Circumcision = FC, Female Genital Mutilation = FGM) が広く国際社会で議論されるようになって一〇年ほどが経過した。

その間、国際諸機関や国際会議での議論、欧文での関連文献の出版が相次ぐ一方、わが国でも、メディアや研究者、あるいは反FGM運動のグループによる報告・発言・提言が続いている。アフリカ人による廃絶運動の報告やアメリカに逃れて難民認定されたトーゴの女性の来日もあった。二〇〇三年四月には、国際的なFGM論争の火つけ役となったアメリカ合衆国のアフリカ系作家アリス・ウォーカー(『カラー・ピープル』でピューリッツァー賞を受賞、小説『喜びの秘密』やビデオ『戦士の刻印』などでFGMへの反対を訴えている)が来日して講演を行っている。

一方、「女子割礼」に関する情報の蓄積に伴い、大学の講義でこの問題を取り上げるアフリカ研究者が増えた。ジェンダーや女性学の授業でも、さ

らに心理学や哲学の授業でも取り上げられることがある。卒業論文や修士論文のテーマに設定する学生も年々増えている。

なぜか？ その理由は、「女子割礼」が世界的規模で展開してきた女性やジェンダーに関する研究の根源に触れるような問題を内包しているからではないだろうか。つまり、女性のセクシュアリティの管理とそれから派生する様々な文化的・社会的・政治的問題群である。家父長的価値観の遍在や女性によるその内面化の問題もその中に含まれる。

こうした問題群に通底する究極の論点は、「女子割礼」を含む女性の性の管理が、「なぜ二一世紀の今も続いているのか？」と、「どうしたら、解決することができるのか？」という二つに絞ることができるとはできないのか？ この二点は、後者の問いに答えるためには、前者の疑問に答えなければならぬという関係にある。

しかし、この究極の設問に答えるのは簡単ではない。なぜなら、「女子割礼」や性の管理の問題は、社会構造や慣習の中に深く埋め込まれ、民族

的・宗教的な様々なアイデンティティとも深く関係しており、それが、時代の推移の中でさらにナシヨナリズムやイスラム復古主義と結びついたり、それらの道具にされたりしてきているからである。そうした状況は、近年の西欧起源の人権概念の広まりとそれに抵抗する国家主権との文化的コンフリクトや、さらには国家の政策と草の根の共同体や個人とのコンフリクトが新たに加わることによって、いつそう複雑になっている。

本特集では、富永がこうした現状を研究動向の中で明らかにした上で、異なる学問的専門領域の方々にそれぞれの視点から、「女子割礼」をめぐる問題を論じていただいた。

「女子割礼」の廃絶運動に関わりながら、医療従事者として現場の実情を調査されている若杉なおみ氏の論文「FGMの起源と文化」は、女性の健康とジェンダーやセクシュアリティの視点から「女子割礼」の問題に深くメスを入れた論考となっている。

一方、エチオピアのフィールドでホール社会の

農業調査を行ってこられた宮脇幸生氏は、論文「国家と伝統のはざままで」において、ホール社会に埋め込まれたその意味を象徴人類学の手法を用いながら丹念に掘り起こし、分析した。外部者の目に見えてきたものを内部の者の視点で検証しながら、宮脇氏は、伝統と国家とのはざまで動き出した女性に一抹の期待を寄せている。

さて、「女子割礼」研究で最も遅れている領域が歴史学であり、日本での研究蓄積はきわめて限られている。そうした中で、永原陽子氏は、論文「女子割礼／FGM問題の歴史的考察のために」において、「女子割礼」を伴わないナミビアの成女儀礼の事例を紹介しながら、ややもすれば現象面にのみ集中してきた「女子割礼」の議論の背景にあるジェンダー構造を歴史的に読み解くことの重要性を課題として提示した。

研究動向から明らかかなように、英語圏における「女子割礼」をめぐる研究はかなりの広がりを見せている。それに対し、わが国での「女子割礼」やイニシエーション儀礼の研究は、ようやく緒に

ついたところである。本特集が、「女子割礼」やジェンダー研究に関心を持たれている方、あるいはこれから研究しようとしている方々に多様な視座を提供できれば、企画者としてこれに勝る喜びはない。

なお、本特集は、二〇〇三年五月に開催された第四〇回日本アフリカ学会学術大会における「女性フォーラム」主催の「FGMワークショップ」（コーディネーター富永）での報告をもとにしていることを付記しておきたい。

（富永智津子）